「イエス様を主と信じる」

ヨハネによる福音書20章24～29節

女子聖学院中学校高等学校　英語科教諭　藤澤　唯

この聖書の箇所は、イエスさまがあの悲惨な十字架刑にかかり亡くなったあとの話です。墓に納められたイエスさまは、神さまの御言葉の通り復活し、弟子に姿を現します。墓にやってきた婦人達に、歩いている途中の弟子達に、また家に閉じこもっている弟子達に、復活したイエスさまは姿を見せました。弟子達はびっくり、興奮して「私たちは主を見た」と話していました。しかし、イエス様に出会えなかったトマスは、かたくなに信じようとしませんでした。自分でイエス様を見なければ信じない、と閉ざしていました。このトマスをみなさんはどう思いましたか？ほかの皆が見たと言っているのだから信じればいいのではないかと思いますか？または、自分の目で見たことを信じるのが普通と思いますか？現代のような情報が氾濫している社会で、流れてきた情報を鵜呑みにして信じてしまうことが大きな被害につながりうるということも私たちは知っています。人間関係でも、噂話を鵜呑みにして「あの人ってそうなんだ」と自分できちんと付き合う前から思い込んでしまうことの危うさも知っているはずだと思います。だからトマスの「自分で確かめないと信じない」という態度は大切なことじゃないかとも思うのです。

しかし、聖書でイエスさまがわたし達に語っておられるのは、「信じないものではなく、信じるものになりなさい。」「見ないのに信じる人は幸いである」なのです。何を信じなさいと言われているのか。トマスにとって「信じなさい」と言われたことは、イエスさまが復活したということでした。イエスさまが十字架でなくなったのに復活したという、信じられないような事実を疑わずに信じなさいと言われているのです。それは、聖書を通して私たちにも語られていることです。イエスさまが自分の主、救い主であると信じなさいと語られています。この私の罪を負って十字架にかかり、復活された主イエスを信じなさいとのメッセージを私たちは受け止められるでしょうか？

私自身の場合は、中学１年生で初めて聖書に触れました。はじめは「へ～、こんなことをするのか、聖書ってまだよくわからない」というくらいに、あまり積極的に関心は持っていませんでした。しかし、宗教委員をしたことがきっかけで、礼拝とか聖書に少しずつ関心を持つようになりました。礼拝などで聞く御言葉が、自分へ語られているメッセージとして受け止めるように自然となっていました。だから、神様が共におられるということも、自分でもそう思うようになっていました。しかし、「イエスさまが私たちの罪を負って十字架にかかり、復活した」と何度聞いても、それが自分へのメッセージだとはなかなかわかりませんでした。言葉では理解しても、「自分の罪を負って」という部分と、「死からの復活」がまったく自分の中にすとんと落ちる感じがしませんでした。ほんとうに、十字架の死と復活のメッセージにはっと気付かされたのは、もっと後になってからでした。それは、友人関係の経験を通して、自分の中にこんなに深い罪があるのか、自分の罪とはこんなにも暗い闇であるのか、と気付いた時でした。今まで聞

いてきた十字架と復活のメッセージが、本当に自分へ語られていることだったと気付いたのです。だから、この私の罪を背負ってイエスさまが十字架にかかってくださったことに震える思いがしました。同時に、死で終わりではなく、復活という希望を神様が与えてくださっていることに、感謝の思いがしました。

イエス様の復活という、神さまのわざを知ることは、私たちの知識や常識という枠を超えた力があると知ることだと思います。自分の力、自分の考えを飛び越えた、目に見えない神さまの働きがあると知ることです。それは、トマスの自分で確かめないと信じないという態度とは反対のことなのです。イエスさまがトマスに「信じるものになりなさい」「見ないのに信じるものは幸いである」と語ったのは、私たち自身にも語られていることです。自分で確かめられないもの、目には見えないものがあるけれど、信じようと踏み出すように私たちは導かれています。それは、自分の考えることを優先しようと自分中心に考えるのでは無く、神さまの御心を求めてゆだねる生き方にかえられるということです。神様にゆだねる信頼するそれはとても安心感のあることなのだと感じます。でも私たちは、目に見えるもの、自分の思いにしがみつきたくなるものです。見えるものが確かだと思うからです。見えない神様の働きにすべてゆだねて待つことは忍耐のいることだと思います。私たちが解決を早く望んでしまうので、神様を信頼して待つことがとても難しいとも感じます。

しかし一方、私たちは毎朝神様に心をむけるのです。永遠の絶対の存在です。私たちは知っています。神さまのみ絶対に信頼できるお方なのです。自分で「ダメだ、どうしようもない」と思うところに力を与えてくださり、また自分では思いよらないところへ恵を与えてくださる方です。いったん、どうしようもないと思う状況になっても、神様は必ず解決へと導いてくれる、祈りは聞かれるということを何度となく経験しました。みなさんはこの 1 年間をふりかえって、どう思いますか？

今日歌った讃美歌270には1節に「信仰こそ旅路をみちびく杖　よわきをつよむる力なれや」とありました。2節には「わが主をかしらと仰ぎ見れば、力の泉は湧きて尽きず」とあります。イエスさまが主であるとの信仰、神さまの変わることのない愛への信仰はわたし達の心を強めてくださいます。自分が不安なとき、これでよいのかと悩むとき、自分の罪の大きさにたじろぐとき、イエスさまが友となって歩んでくださると信じるなら、私たちは力を与えられるのです。それは、どんなに受け入れ難い自分自身でも、主は受け入れてくださるからです。わたし達の罪を負ってイエスさまが十字架にかかるほど、神様は私たちを愛してくださるからです。

だから、私たちはこのように確信したいとおもいます。コリント人への第2の手紙4章18節を読みます。

わたしたちは目に見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

神さまの存在も、イエス様の存在も私たちは目でみて確かめることはできません。しかし見なくても、永遠なる存在にこころを向け、イエスさまが主であると信じるわたし達になりたいと思います。

お祈りします。

天の父なる神様、今朝もあなたを賛美することから1日を始められます幸いを感謝いたします。どうかわたし達が、イエスさまを自分の主と受け入れられますように、導いてください。一切を主にゆだねます。わたし達と共にいてください。

今日この場に集っていない仲間の上にも、あなたからの豊かな恵みがありますように。
この小さな祈り、わたし達の主イエス・キリストのみなによって御前におささげいたします。アーメン。

2011 年 2 月 24 日　女子聖学院中学校　チャペル礼拝